



「夜の大捜査線」
スタジオ・クラシック・シリーズ

DVD 発売中
価格：¥2,848 (税込¥2,990)
20世紀フォックス ホームエンターテイメント ジャパン



© 2006 Metro-Goldwyn-Mayer Studios Inc. All Rights Reserved. Distributed by Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC.

今回は、一九六〇年代後半から七〇年代前半にかけてアメリカ映画が最も輝いた時代のスリラー映画の傑作のひとつ「夜の大捜査線」を紹介する。この映画は、「華麗なる賭け」等を撮ったノーマン・ジュイソンが監督し、シドニー・ポワチエとロッド・スタイガーが競演、一九六七年度の作品賞、主演男優賞(ロッド・スタイガー)等アカデミー賞の五部門を獲得している。物語は、たまたま休暇の途中、乗り換えのため降りた南部の田舎の駅で、東部の警察の殺人課の敏腕刑事(シドニー・ポワチエ)が、人種差別が旧態依然として存在する田舎町の保安官(ロッド・スタイガー)とともに殺人事件の捜査に当たるといふものである。スマートで頭の良いアフリカ系アメリカ人と野暮ったく血の巡りが悪い粗野な白人とが角突き合わせながらも、最後には理解し合い、問題を解決するというストーリー展開自体は、この時代から始まったものであり、今では全く珍しくない。しかし、「夜の大捜査線」を一味も二味も違ったものにしてるのは、第一には主演二人を始めとした俳優たちの演技が冴えていることである。ロッド・ス

鉄道と映画 — 28

人種差別が根強く残る南部の田舎町で、殺人捜査に参加することになった黒人刑事の葛藤。

IN THE HEAT OF THE NIGHT

「夜の大捜査線」

文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション(FCC)への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。



タイガーは、「質屋」等でその演技達者振りは良く知られているが、この映画で演じる頭は良くないがタフでしかもいい加減疲れている保安官役の出来は出色であり、同じく演技達者ということでは有名なシドニー・ポワチエも一歩譲る。さらに保安官補佐のウォレン・オーツ等の脇役も南部のうらぶれた白人たちを好演している。第二は、発展に取り残され、人種差別、貧富の格差そして暴力という旧弊の残る南部の田舎社会がよく撮られていることである。例えば、大地主に会いに行く途中、綿摘み労働者の中を走るシーンは、その後の大地主宅におけるやり取りのシーンとのコントラストの妙が良く出ていると思う。第三は、南部の夏の蒸し暑さが全編を通じスクリーンから滲み出ていることである。

鉄道は、かなり年代物のディーゼル車が、レイ・チャールズの歌う「イン・ザ・ヒート・オブ・ザ・ナイト」と共にシドニー・ポワチエ扮する刑事を南部の田舎駅に下ろすファーストシーンから、刑事を乗せて去っていくラストまで重要な場面で登場する。その中でこの田舎駅は、刑事が誤認逮捕されるシーン、事件解決に協力する気無くし、町を離れようとするシーン、事件解決後保安官との別れのシーンという映画の節目節目に上手に使われる。特にラストは、交わす言葉は少ないものの、双方が理解し合ったことが伝わる見事な出来栄である。もうひとつ特筆に価するのは、他の鉄道映画ではほとんど無いことであるが、アカデミー音響賞を受賞しているだけあって、汽笛が実に印象的に使われていることである。映画の中で、しばしばディーゼル車の汽笛の音が微かに伝わり、その度にこの寂れた町にも鉄道が通っていることを思い出されるのである。

もつともこの映画にも欠点があるわけではない。観ているときはそれほど気にならないが、後で思い起こすと捜査の展開に飛躍があるし、さらにこれは、映画自体の欠点ではないが、「夜の大捜査線」という邦題には首を傾げざるを得ないことである。全く内容とかけ離れており、原題の「イン・ザ・ヒート・オブ・ザ・ナイト」の方が比較にならないくらい良いと思う。